

# 青年国際交流事業の在り方検討会(第5回)

## 議事録

## 青年国際交流事業の在り方検討会（第5回）議事次第

日時 令和4年6月2日（木）13:00～15:00

場所 オンライン会議（Webex）

### 1 開会

### 2 議事

(1)事務局からの説明

(2)意見交換

(3)その他

### 3 閉会

#### **出席者**

（委員）

南島座長、家島委員、川澤委員、菊地委員、中村委員、宮寄委員

（内閣府）

黒瀬青年国際交流担当室長、田中参事官、山本調整官、梅田参事官補佐

（オブザーバー）

一般社団法人日本旅行業協会 千葉信一 海外旅行推進部副部長

一般財団法人青少年国際交流推進センター 駒形健一 理事長

南島座長 本日は、御多忙のところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。定刻となりましたので、「青年国際交流事業の在り方検討会（第5回）」を開催させていただきます。

それでは、まず最初に、本日の出欠状況について事務局よりお願い申し上げます。

梅田参事官補佐 本日の会議はオンライン開催になっております。

本日は委員の方全員御出席いただいております。オブザーバーのお二人にも引き続き御出席いただいております。内閣府側から、黒瀬青年国際交流担当室長、田中参事官、山本調整官が参加しております。本日もどうぞよろしく願いいたします。

南島座長 ありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、議事に入りたいと存じます。議事次第がお手元にございましたら御覧いただければと思います。本日の議事ですけれども、最初に事務局からの説明となっております。報告書の素案ができておりますので、そちらについての御説明を頂くことといたします。意見交換が2番目の議事として上がっております。委員の皆様の御意見を徴したいと考えております。3番目はその他でございますけれども、各種連絡事項等ということになるかと思っております。この順序で進めてまいりたいと思っております。

それでは、意見交換に先立ちまして、事務局よりお作りいただきました報告書（素案）の御説明をお願いしたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

○梅田参事官補佐 それでは、私から報告書の素案について御説明申し上げます。

ただいま資料を共有の画面を映させていただきますが、座長とも相談させていただきました。事務局でこれまでの議論を踏まえて素案という形で取りまとめさせていただきます。本日、こちらを資料としてもお配りしておりますが、まず、私のほうから全体を読み上げる形で御紹介させていただいて、その後、皆様方から御議論いただくという形にさせていただければと思います。

それでは、最初から御説明させていただきます。まず、構成になりますが、「1. はじめに」「2. これまでの事業の成果と事業強化の視点」「3. 新たな青年国際交流事業の在り方」「4. 事業強化の視点を踏まえた新たなプログラムの方向性」「5. おわりに」という形にさせていただきます。

冒頭ありますけれども、素案の形で報告書を示しておりますが、副題として「令和の新たなプログラムと事業強化の視点(仮)」という形でつけております。

中身でございますが、1ページ目から順番に読み上げをさせていただきます。

#### 青年国際交流事業の在り方検討会報告書(素案)

##### ～令和の新たなプログラムと事業強化の視点(仮)～

##### 1. はじめに

- ・青年期における国際交流の経験は、その後の人生にとって非常に大きな意味を持つものであり、内閣府青年国際交流事業を通じて、次世代グローバル・リーダーを輩出す

ることは、我が国の成長力の源泉につながるものでもあることから、その機会を確保することは大変重要な課題

- ・内閣府青年国際交流事業は、これまでに「国の事業ならではの大規模な国際交流」「長期間かつ密な交流」という特長をいかして、次世代グローバル・リーダーの育成や国際親善に大きく貢献
- ・令和の時代においては、グローバル化の一層の進展やSDGsをはじめとした地球規模課題の解決に向けた取組が求められるほか、国際情勢の不確実性も高まっているなどの変化も生じており、求められる次世代グローバル・リーダーの人材像を明確に再設定する必要
- ・事業開始時と異なり、留学や海外旅行など国際交流も容易になり、本事業の果たすべき役割も変化する中、情報通信技術の利用の一般化等により新たな国際交流の可能性も拡大
- ・今後、新型コロナウイルスをはじめとする感染症のリスクにも留意する必要
- ・こうした点を踏まえ、これまでに培ってきた経験を基にその特長を失うことなく、令和の時代に相応しい新たな国際交流事業を創造することが求められる

## 2. これまでの事業の成果と事業強化の視点

### 2.1 内閣府青年国際交流事業の特色

- ・内閣府青年国際交流事業は、昭和34年度に「青年海外派遣」事業として開始されて以来、60年以上にわたり実施されている我が国で最も歴史のある青年国際交流事業
- ・現在は、航空機による派遣・招へい又は船による多国間交流による5つの事業を行っており、日本と世界各国の青年の交流を通じ、国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバル・リーダーを育成することを目的とした事業を実施
- ・これまでに事業に参加した我が国の青年は17,700人、海外の青年は23,200人を超えており、世界で活躍する多数の人材を輩出
- ・また、事業に参加した青年が日本青年国際交流機構(IYE0)を自主的に組織。世界40か国以上で設立された外国の同窓会組織や全国47都道府県で設立された日本青年国際交流機構と連携して、諸外国と地域につながるネットワークを構築

### 2.2 これまでの事業の実施状況と成果

- ・内閣府青年国際交流事業は、「国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバル・リーダー」の育成を目標として掲げ、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神やリーダーシップを持った青年を育成する、事後活動として、青年の社会貢献活動等による活動を促進する、国境を越えた青年相互の友好と理解を促進し、長期にわたる緊密な人的つながりを形成する、ことを目的として実施
- ・平成26年度に実施した調査によると、事業参加後の「リーダーシップを発揮した経験」「社会貢献活動の経験」「国際的な人脈・ネットワークの広がり」のいずれも他の国際交流事業参加者よりも高い数値を示している

- ・また、事業参加による人生やキャリアへの影響として「自分の人生や人としての生き方に良い影響を与えている」「事業に参加して、生き方の姿勢やものの見方が変わった」など、参加者個人の人生観に大きな影響を与えている
  - ・一方で、事業参加後のキャリアに関し、「海外勤務その他グローバルな活動の経験」「国際的な機関・団体への勤務・所属の経験」については、内閣府事業参加者との青年国際交流事業参加者の間に大きな差はみられていない
  - ・内閣府青年国際交流事業は、その目的に照らして、一定の効果をあげてきたことが示唆される。今後の評価にあたっては、短期的・長期的な効果検証を行う必要
- ということとまとめております。

続きまして、6ページ目です。

## 2.3 事業強化の視点

### 2.3.1 育成すべき青年の人材像

- ・本事業における目標である「国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバル・リーダーの育成」に向けては、時代の変化を踏まえ、まずは、育成すべき人材像を具体的に設定した上で、その人材像を踏まえた事業の設計を行うべき
- ・本事業において育成する次世代グローバル・リーダーには以下のような要素が求められると考えられる

(次世代グローバル・リーダーに求められる5つの要素)

#### 未来志向(Future)

現在の国際社会においては、SDGsをはじめとする未来を見据えた地球規模課題への取組が重視されている。次世代グローバル・リーダーは、足元の課題だけでなく、50年後、100年後の未来を語るリーダーであることが求められる。

#### 多様性(Diversity)

各分野にわたる地球規模の困難な課題を未来志向で解決していくためには、多様な知恵や考え方をもち寄ることが不可欠であり、国籍はもちろんのこと、地域、性別、障害の有無、職種・分野等に関わらず、異なる存在を受容する力を持つことがリーダーには求められる。

#### コラボレーション(Collaboration)

異なる多様な意見を課題解決につなげていくためには、互いを尊重しつつ目標を共有し、その実現に向かい、関係するすべての人が力を結集し、行動へ移るようまとめていく力がリーダーには求められる。

#### 国際・地域感覚(Glocalism)

地球規模の課題解決に向けた行動を図る上では、グローバルな視点を持つとともに、その課題に直面している現場(地域)の視点の感覚を持ち、課題解決を具体的な行動につなげる実践力を持つことが必要である。

#### 社会貢献(Volunteerism)

実際にこうした行動をとることは容易なことではない。リーダーには、自らの経験を広く社会に還元していくというボランティア精神を持ち、努力を惜しまず、社会課題の解決を図っていくための活動を継続的に行うことが求められる。

### 2.3.2 3つの局面と事業強化の視点

- ・上記のような要素を持つ「次世代グローバル・リーダーの育成」という目標の達成を見据えて、以下の3つの局面においてそれぞれ、サブゴールを設定して事業の充実に向けた取組を進める

<募集段階> 意欲の高い青年の参加を募る

<事業実施段階> 効果的なプログラムを実施する

<事後活動段階> グローバル・ネットワークをいかにし事後活動を継続する

- ・上記のそれぞれの局面について考えられる強化の視点を設定し、その視点に基づいた事業の構築及び評価を行うことで、事業の充実を図る

(事業強化の視点)

<募集段階>

育成すべき人材像に即した選考と広報強化

様々な人が参加しやすい環境整備(日程の設定、プログラム整備)

<事業実施段階>

様々な人が参加しやすい環境整備(再掲)

密度の高い交流環境の創造

国の事業として特色のある事業設計

<事後活動段階>

同窓会組織、既参加青年ネットワークの強化・見える化

図表4に、今まで御議論いただいた図を記載しております。

### 3. 新たな青年国際交流事業の在り方

- ・時代は令和に入り、国際社会の中で、SDGsをはじめとした地球規模課題への解決に向けた取組が求められており、地域の現場において課題解決の実践を図っていくグローバル・リーダー育成が求められている
- ・国際情勢の不安定化などの状況も生じており、様々な国の状況や利害調整を含め、相互理解の下、国際交流を行う意義や重要性も高まっている
- ・新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、情報通信技術を活用することが一般化し、社会に定着。国内でWeb会議が日常的に行われるのはもちろんのこと、国際会議をWeb会議で開催する機会も増加
- ・こうした急速な社会の変化が生ずる中、青年国際交流事業も大きな転換期を迎え、時代の変化に対応した新たな青年国際交流事業を構築していく必要

#### 3.1 募集段階～意欲の高い青年の参加を募る～

育成すべき人材像に即した選考と広報強化

(選考)

選考は、P6において示したリーダーに求められる5つの要素を踏まえつつ、進めるべき。例えば、従来の試験に加えて、5つの要素に照らし、自分自身が今後どのように行動し成長していきたいかを示す「将来設計書」を提出してもらい、選考に取り入れることも有用

また、従来のような一般試験のみならず、「多様性」を重視した採用枠を設定することで、多彩な人材の参加を募ることが可能に

(広報強化)

より多くの意欲を持った青年に参加してもらうためには、潜在的な意識の掘り起こしも含めた広報戦略が必要

多様性に富んだ人材の参加に向けて、文化・芸術団体等に向けた広報を強化すべき  
大学などの教育機関のほか、社会人の参加増に向けて、経済界向けの広報も強化すべき

潜在的な意識の掘り起こしの観点からは、YouTubeやSNSを活用して、より多くの人の目に触れる広報を実施するほか、既参加青年の生の声や現在の活躍の状況を届けるなど、そのプログラムの有効性を効果的に伝えるコンテンツを充実させていくことが必要

様々な人が参加しやすい環境の整備

内閣府青年国際交流事業では、航空機事業は概ね2週間程度、船事業は概ね2か月程度の連続した期間で実施

特に船事業については、2か月程度連続した期間の参加が必須であることが仕事や学業との両立の観点から、参加のハードルとなっている可能性

オンラインによる中長期の研修・交流プログラムと集中的な対面交流を組み合わせたプログラム実施とするなど分散化に取り組む必要

より多くの社会人の参加のためには職場の理解が必要であり、企業等の協力が後押しになると考えられることから、勤務先の企業等にとって社員が参加する意義を感じられる魅力あるプログラムを構築するとともに、経済界をはじめとした各方面への協力依頼にも取り組む必要

グローバル・リーダーとして活躍したいという意欲を持ちつつも、自身の置かれた環境がハードルとなって、参加を断念するケースがないよう、経済的理由による自己負担免除規定の適用

オンライン試験の活用などにより、どこに住んでいても受験を可能とするほか、障害者にも配慮した試験環境の整備にも取り組む必要

### 3.2 事業実施段階～効果的なプログラムを実施する～

国の事業として特色のある事業設計

- ・青年国際交流事業は、昭和34年度から始まった歴史ある事業。この間、移動交通手段

- も大幅に進展し、海外旅行や国際交流も以前よりも容易に体験することが可能に
- ・こうした状況の中で、官民間問わず様々な国際交流プログラムも存在する中で、次世代グローバル・リーダーの育成という目標に向けて、国の事業ならではの特色のある効果的な事業設計をしていくことが必要

(各国政府と協調して行う大規模な青年国際交流プログラム)

現在、青年国際交流事業では、内閣府とASEAN各国との共同事業による「東南アジア青年の船」事業、内閣府が主催し、各国政府の協力を得て行う「世界青年の船」事業等の大規模な青年国際交流プログラムを実施

各国の意欲ある青年が一堂に会して、交流を行うプログラムは効果的。各国政府も巻き込んだ大規模な青年国際交流の枠組みは、国の事業だからこそ実施できるもの  
日本国政府が行う事業として各国との青年国際交流を行うことは、国際親善において果たしてきた役割も大きく、各国とも協調しながらプログラム設計を行う必要

(日本国政府及び各国政府等のリーダーとの面会の機会の創出)

日本国政府、各国政府との協力の下に行っている事業であり、総理表敬や各国の閣僚等との面会という貴重な機会を提供

次世代を担う青年期に、このように各国のリーダーとの面会の機会を持つことは得難い経験であり、将来、自身がグローバル・リーダーとして活躍するという意識を高めるまたとない機会

さらにその効果を高めるためには、面会にとどまらず、プログラムを通じて得た経験について、直接意見交換を行う機会を設けるなども検討する余地

例えば、地球規模課題をテーマとした青年代表と政府幹部や各界代表とのディスカッションの機会を提供するなどの取組は、「未来志向」を養う上で、大きな効果が期待できる

これまでは、各国のリーダーとの面会は日本政府及び寄港地での面会に限られていたが、オンラインを活用して、本事業の既参加青年も含め、より多くの国のリーダーとの面会の機会提供の可能性もあり、検討すべき

密度の高い交流環境の創造

- ・本事業では、船での共同生活をはじめ、密度の高い交流環境を創造することで、「多様性」や「コラボレーション」の涵養に成果をあげてきた。一方で、長期間の密室空間での環境は、新型コロナウイルス感染症等のリスクを抱えるほか、時間的制約から仕事・学業との両立が困難という課題
- ・内閣府が令和2年度、令和3年度に実施したオンライン交流プログラムにおいては、日程による制約が少なく参加しやすいことのほか、ディスカッション等による国際交流を通じて、一定のグローバルなリーダーシップを養うことができたとの声もあり  
一方で、いわゆる隙間時間などの密度の高い交流環境は生み出しにくいほか、船での共同生活や実地で会ってともに汗をかく経験など対面でしか味わうことができない



リアルの交流を求める声もあり

効果的なプログラムの構築にあたっては、こうしたことを踏まえながら、バーチャルとリアルの特長をいかした一体的なハイブリッドプログラムを設計することが効果的

単なるディスカッションにとどまらず、例えば、「具体的なプロジェクトのプランニング」「現場でのプロジェクトの実践」という一連の過程を通じた、「共に汗をかいて、一つのプロジェクトをやりとげる」という経験は強い記憶となり、未来の若者たちの志を支えることにつながる

さらに、これらの体験から得たものについて、「質の高い振り返り」を行うことが、より学びの効果を高める。その後の成長や事後活動につなげていくという観点からも欠かせない要素

(バーチャルの交流)

「未来志向」での考えを深めるための、地球規模の課題を題材とした講義やディスカッションなどの取組により、知識のインプットを行うことが可能

リアルでの交流を前段階における関係構築にむけて、バーチャルの文化交流・アクティビティを取り入れる等、青年相互の自由な交流機会を設けることも効果的  
船での共同生活の前段階から、オンラインを活用して一定のまとまった期間でプロジェクトのプランニングなどを行うことにより、チームビルディングの質を高めることが可能。青年相互の理解や絆が深まるほか、多様な意見を尊重して創り上げる過程の中で、「コラボレーション」の能力を高めることにもつながる

(リアルの交流)

「共同生活」を通じて文化・風習、様々な考え方に触れ、「多様性」や「コラボレーション」が磨かれる

さらに、効果を高めるためには、共同生活に加え、現場の視点を持ち、課題解決を実行する実践力として「国際感覚・地域感覚」を獲得するためには、「Learning by Doing」つまり「実践」から「学び」を得ることが重要。そのため、チームで練り上げた具体のプロジェクトを地域の現場で実行に移す「実践の場」を設けることが効果的

(振り返り)

事業終了後には、事後活動をはじめとした次のアクションにつなげるための振り返りの機会が重要

次のアクションにつなげるためには、初めに設定した目標や目的を振り返るほか、事業参加から一定期間を経過した後にフォローアップを行う機会を設けることも有用  
様々な人が参加しやすい環境の整備(プログラム整備等)

- ・船事業は、現行では、おおむね2か月程度の連続した期間で実施されており、仕事や学業との両立を行いながら参加をすることのハードルとなっている可能性
- ・デジタル技術を活用することにより、週末を活用して数か月～半年程度の中長期のオ

ンライン交流プログラムで事前の関係構築を行った上で、数週間程度の共同生活と実践の場を設けるなどの取組も可能

- ・ 正規の参加者以外にもこの事業の成果を広く裨益させることも検討すべき。例えば、寄港先において、既参加青年や地域住民を招くオープンシップのような企画も考えられる
- ・ さらに、デジタル技術も活用しつつ、障害のある方も参加しやすい事業設計になるよう配慮

### 3.3 事後活動段階～グローバル・ネットワークをいかに活発な事後活動を継続する～ 同窓会組織・既参加青年のネットワークの強化・見える化

(ネットワークの強化)

- ・ ネットワークの活用にあたっては、近年のSNSの普及等により、自主的にグループを作り、その後の交流を図るなどの例も多くみられているものの、参加年度や事業を超えてのつながりには、やや課題
- ・ 例えば、事業横断的な合同研修や事後の報告会を行うなどして、一体感を高めていくことでより広がりを持った活動とすることも有用
- ・ ネットワークの強化について、参加時の交流を一時的なものにしないためには、継続的な交流の機会を持つべき。例えば、事業参加の数年後に交流を行うなどの交流機会を提供するなどの方策も有効
- ・ オンラインの活用なども含めて、国内外の既参加青年にプログラムに積極的に協力、参画をしてもらうような設計をしていくということも必要
- ・ 既参加青年とのコンタクトを継続的に取ることが可能な環境を整備しておくことが重要であり、既参加青年のデータベースの充実が必要
- ・ データベース更新頻度を高めるためには、参加するメリットが感じられるものとする必要がある。例えば、データベースにより構築されるネットワークを通じて、プログラムへの参画に係る最新情報等を提供したり、活発な事後活動を継続している既参加青年に交流の機会を提供することなどが考えられる
- ・ 個人情報の扱いに配慮しつつ、世界で普及している既存のプラットフォームの活用や更新を促すインセンティブについても検討

(ネットワークの見える化)

- ・ 青年国際交流事業に参加をした青年には、事業への参加を通じて得た経験を広く社会に還元していく「社会貢献」が求められており、内閣府と同窓会組織が連携し、活動の見える化を図り、戦略的に発信していくことが重要
- ・ ネットワークの活動をどのように発信していくかという点については、活動の実態を収集・把握して、全体像を示すということに取り組むことが求められる
- ・ 全国・世界各地にいる既参加青年の活躍の発信は、青年国際交流事業の成果を示すという観点のみならず、新たな意欲ある青年の募集などにもつながる重要な視点

- ・現在、同窓会組織が着手している取組であるIYEOダッシュボードと連携し、マクロでの事後活動の状況の見える化を図ることが求められる

#### 4．事業強化の視点を踏まえた新たなプログラムの方向性

- ・以上を踏まえ、具体的には次のような方向で新たなプログラムを設計することが考えられる

ということで詳細は別紙の形にしておりまして、お配りしております別紙で横の表にまとめております。その中のエッセンスということではありますが、以下でございます。

- ・意欲の高い青年の参加に向けた「プログラムの魅力向上」「仕事・学業との両立が可能なプログラムの設計」「広報の強化、選考の充実、多様性重視枠の創設」
- ・「船上での共同生活」と「実践の場」を組み合わせたプログラム構成かつ長期の閉鎖空間によるリスクを回避
- ・上記の観点から、国内航路で共同生活しながら、複数の地域に入って社会実践活動を行う形式により実施
- ・デジタルなど新たな技術も活用しながら、チームビルディングなどのオンライン交流を充実
- ・地域の社会実践活動には、地方公共団体や同窓会組織(IYEO)と積極的に連携
- ・その他、上記2.3に示した事業強化の視点を踏まえた評価を行い、事業の充実を図る

ということでまとめております。別紙が横の表でSTEP 0 からSTEP 4 という形でそれぞれに行うことの詳細例をピックアップしております。こちらも後ほど参照いただければと思います。

#### 5．おわりに

- ・青年国際交流事業は、本検討会での議論を基に、伝統を継承しつつ、大胆に変革し、いわば「令和の新事業(P)」として、再スタートしていくべき
- ・この際、次世代グローバル・リーダーの育成という観点に加え、関係各国の意見や国際交流による国際親善としての役割などにも留意が必要
- ・新たなプログラムは継続的に実施し、PDCAサイクルにより実施状況を検証しながら、プログラムの熟度を高めていくよう努めることが求められる。また、参加者の意見等も丁寧に聞き取りながら、不断の見直しを図っていくべき
- ・こうした取組を通じ、今後も引き続き、国際社会・地域社会の様々なフィールドで活躍する次世代グローバル・リーダーを輩出していくことを期待

ということで締めさせていただきます。

こちらが事務局で今までの議論を踏まえて準備させていただいた報告書の素案です。

以上、長くなりましたが、よろしく願いいたします。

○南島座長 ありがとうございます。

この後、委員の皆様にご意見等伺いたいと思います。順番でございますけ

れども、先にオブザーバーのお二人からこの報告書をまとめるに当たって参考になりそうな点やお気づきになられた点をお伺いしたいと思います。駒形理事長、千葉副部長に先にコメントを頂こうと思います。その上で委員の皆様方に御意見を伺ってまいりたいと思います。一巡目はこの順番でお願いしたいと思います。家島委員、川澤委員、菊地委員、中村委員、宮寄委員という順番でお伺いしてまいりたいと思います。

順番が回ってくる前に、先にもう一枚、補足として別紙「新プログラムのイメージ」というものを出していただいております。これはもともと本文に入っていたものでありますが、別紙の形でまとめていただいたほうが分かりやすいのではないかとということで、別紙に改めて整理していただいております。新プログラムのイメージが一枚紙で収まっておりますので、この内容を見ると、何をスパイラルアップさせるのか、今までの事業と違う形で事業展開していこうとしているのかという特徴を見てとることができるようになっております。この新プログラムのイメージについても事務局から御説明をお願いできますでしょうか。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

今、座長からもお話がございましたけれども、こちらは一枚で新プログラムのイメージということでまとめております。簡単にポイントだけかいつまんで御説明いたしますが、STEP 0 ということで、まず青年の募集・選考から始まりまして、その後、STEP 1 として関係構築を行う。STEP 2 として交流と実践を行う。それから、前回もお話がありました振り返りという形でSTEP 3 を設けております。最後に事後活動のSTEP 4 ということで、この段階に分けてそれぞれ取組を整理しているものでございます。

具体的な取組の中で少しだけ御説明させていただきますが、STEP 0 の「青年の募集・選考」でございます。こちらは、まず、魅力あるプログラムの構築をするということ、2つ目に青年に響く広報コンテンツ、手法の充実・強化、例えばショート動画の広報コンテンツを作成、こういったところも具体的取組として記載しております。3つ目に次世代グローバル・リーダーとしての活躍意欲、継続的な事業参画を重視した選考ということで、将来設計書も提出してもらいながら選考していくということでございます。4つ目に多様性重視枠の創設ということで、文化・芸術、ものづくり、こういったところでの多様性重視枠を創設していこうということ具体的取組として準備しております。3つ目、4つ目に共通してということでもありますけれども、語学力についても議論があったかと思いますが、十分でないところに対して語学力の習得に向けた措置を検討していくというのが一つの論点と考えております。

STEP 1 は「関係構築」ということで、主にオンラインを活用した事業構築ということになりますが、まず目標設定をしっかりしていこうということ設けております。その上で、グループディスカッション、アクティビティ、メタバース空間の活用、最後にここが肝になるかと思いますが、地域実践活動プランニングというところで特に特定の地域を題材にして実践力を醸成するためのチームビルディングの実施、具体的には5～6名程度のチー

ムでのプランニングを行うことを予定しているということでございます。

STEP 2 は共同生活と実践の場を組み合わせる形になりますが、まず、船を使ってベースキャンプという形で共同生活をやっていくということを書いております。それから、国内数か所を周遊していこうということで、地域訪問活動で既参加青年の協力・参加の下、日本の地域の紹介を行う。それから、先ほどお話ししたオープンシッププログラムも取り入れていこうということです。地域の実践活動は、具体的には一定期間ということで1週間から10日程度をお示ししておりますが、停泊して現地に入って活動していくという形です。この際には、地域のNPO、既参加青年と協力・連携して、STEP 1 の でプランニングしたものを実践していこうという形にしております。それから、このプログラムの一つの特徴である表敬もこの中で実施していこうという形です。

STEP 3 は新たに入れておりますが、「振り返り」という形で、ここが非常に重要だというお話があったところを踏まえて、まず、ラップアップセッションということで、最初に設定したものについての自己評価をしていこうという話であったり、2つ目に事業報告会ということで、既参加青年が事業横断的な形で成果発表会を行ってみようということ、3つ目にフォローアップ交流ということで、事業参加数年後にリアル・バーチャルのハイブリッドでフォローアップ交流を実施していこうということです。

STEP 4 は「事後活動」ということで、先ほど事後活動のところでも触れたようなエッセンスをこの中でも実施していこうということで記載しております。

この一枚の中で新しいプログラムを皆さんにイメージしていただけるようにさせていただいたということでございます。

以上、長くなりましたが、よろしく申し上げます。

○南島座長 ありがとうございます。

事務局で御用意いただいた資料は以上でございます。

「2. これまでの事業の成果と事業強化の視点」「3. 新たな国際交流事業の在り方」「4. 事業強化の視点を踏まえた新たなプログラムの方向性」が報告書の本体、中身になりますので、委員の皆様にごこの部分を特にお伺いしたいと考えております。その他お気づきのところも併せて言及していただいても構いません。

御発言の際は、ページ数が複数ありますので、何ページと指定していただいて御指摘いただければと思います。また、事務局への御質問がある場合には、「事務局にお尋ねいたしますけれども」というふうに言っていただきますと、事務局側としても答えやすいので、そのように御指定いただければと思います。よろしゅうございますか。

それでは、意見交換に参りたいと思います。先にコメントを頂戴したいと思います。青少年国際交流推進センターの駒形理事長、コメントいただけますでしょうか。

○駒形オブザーバー ありがとうございます。

今回、令和の新しい青年交流事業の在り方ということで、募集から本体の事業、事後活動まで全て大きなまとまりとしてまとめていただきまして、ありがとうございます。

私の立場からいうと、まず事後活動、グローバル・ネットワークという関係で、政府がこういう国際交流事業に投資して、それは初期投資なのですけれども、いろんな場面で波及効果があって、乗数効果ではないのですが、1だけでなく2になったり3になったりするというのが望ましいわけです。ですから、グローバル・ネットワークといいますか、事後活動がいかに関与効果があるものになるかというのが大事ではないかと思っています。

新プログラムのイメージになるのですが、STEP4の「世代を超えた交流機会の創出」があって、その中で、既参加青年を集めた国際会議の開催への協力とあります。「東南アジア青年の船」事業とか「世界青年の船」事業の同窓会組織はもちろん年一回の国際会合を開いていますが、それ以外に各国の独自の企画による交流プログラム、交流プロジェクトを行っています。それは内閣府が毎年発行する事後活動ニュースで紹介されています。

過去で言うと、東日本大震災後にオマーンでギャザリングがあって、東日本大震災支援のプロジェクトであったり、あるいはケニアやタイ、スリランカで子供たちの支援のプロジェクトをやってきたり、これはみんな日本のIYEOと連携してやっているプログラムですけれども、マレーシアでスタディツアーをやったり、様々な国で様々なプログラムが展開されていますので、今、コロナで全てストップしていると思いますが、こういうものをしっかりデータベースのほうに載せていく。こういったものについて何らかの支援ができればと思います。国際会議への支援、協力だけでなく、こういう各国の同窓会で行われている自主的な交流プログラムへの支援というのも考えられるのではないかと思います。

こういう各国がいろんな自主事業を行う時にみんな集まってくるというのは、やはり再会する魅力というのがあって、再会する魅力が何で出てくるかというと、もともとの事業で非常に密度の高い交流プログラムがあって、それぞれの人のつながりが強くなっている。それがあからなので、そういう意味では、本体の交流事業、船の事業であれば船上での生活というのは大変大事ではないかと思っていますので、各地に寄港したり地域活動をするとなっていますけれども、船上での共同生活の際のプログラムをしっかりつくっていただきたいと、根っこが一番大事になってきますから、これがないと波及効果も十分にならないのではないかと思いますので、そういった点をお願いします。

そういう意味では、今回、コロナの中で国内の航路ということになっていますので、コロナで海外に行けないというのは分かりますが、特に日本参加青年にとっては海外に行くという経験ができないのはちょっとどうなのかなと思います。ですので、この事業が終わった後、例えば既参加青年の中で優秀な、いい成果を上げた人をピックアップして、手を挙げてもらって、こういう事後活動のギャザリング、国際会議などに代表として派遣して、そこでも出会いがありますので、インセンティブになるので、フォローアップの中にそういうインセンティブを織り込んで海外に行く機会もつくっていったらいいのではないかと思います。

あと、効果検証の際に募集倍率をちゃんと見たほうが良いと思います。今回、ハードルを下げて、社会人もいろんな人が参加しやすくしたと言っていますが、それによって募集

倍率が上がるというのは、特に日本の参加青年の募集倍率が上がるというのは効果として一番はっきり分かる点ですので、そこら辺をちゃんとしっかり見て、効果を検証して見直しをしていくということが大事ではないかと思いました。

最後に、オープンシップは私が言ったのですけれども、別紙にはオープンシッププログラムと記載があって、報告書案にはオープンシップとしか書いていないのですが、13ページに「オープンシップのような企画も考えられる」となっています。オープンシップというと、普通、船内見学で、いろいろ見て回って終わりという感じなので、この表現だと船内見学して終わり、お客さんで来てという感じですが、そうでなくて、「既参加青年や地域住民が参加するオープンシッププログラム」と書いたほうが、船の中の参加青年と一緒に何か企画してプログラムをつくって共同体験をするというイメージが湧くのではないかと思いますので、そういった表現に変えたらいいのではないかと思います。

以上です。すみません。長くなりました。

南島座長 ありがとうございます。

4点ほど御指摘を頂いていたかと思います。事後活動のところ、国際会議の代表として派遣する等の支援、データベースにしっかり載せて支援するべきというお話、2つ目が船上での生活をしっかりさせることがその前提となるという御指摘、3つ目が募集倍率、評価のところでもしっかり見ることが重要だというお話、最後はオープンシップも単なる船内見学に見えないように工夫するという御指摘で、4点頂きました。ありがとうございます。今みたいに具体的に御指摘いただくと大変助かります。

次に、日本旅行業協会の千葉副部長、どうぞコメントをお願いいたします。

千葉オブザーバー まずは、素案を非常によくまとめていただきまして、本当にありがとうございます。

特に企業側のところにつきまして、私も再三申し上げてきましたけれども、事細かにその辺のところを入れていただいたというのは大変感謝申し上げたいと思います。

一方で、新プログラムのイメージのほうも非常にうまくまとめていただいたのですけれども、ここで事務局に御質問なのですが、非常にうまくまとまってはいるものの、時間的なものがあまり入っていないのですね。例えば、肝になるところというのは今回オンラインを入れたといったところもありまして、STEP1の「関係構築」にどれだけ時間を割いてやっていくのか、これだけの内容をやるということであれば1か月とか2か月という話ではないと思いますので、その辺をある程度明らかにしていったほうがいいのではないかと感じました。

それから、もう一つ、これはプログラムと関係ないのですが、前回の議論の中で年齢について、いわゆる若者の定義といったところの議論が多少なされたと思います。40歳を若者と言うのかどうなのかといったところがあるかと思いますけれども、例えば文化・芸能といったようなところは、20代というのはまだまだ、物によってはまだひよっこにもいかないみたいなどころもありますので、言葉はあれですけれども、そういったところも踏ま

えますと、こういったところの特例措置みたいなものも加えていったほうがよろしいのではないかと。年齢的なところは今回の素案の中には、前回、テーマに上がったにもかかわらず、載っていないので、この辺をどういうふうに考えますかといった2点について事務局に伺えたらと思っております。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

2点の御質問でございます。「関係構築」の期間はということと、「若者の定義」の中で芸術・文化等についての特例についてはいかがお考えかということです。お答えいただける範囲で結構ですが、今、お答えを御用意いただけるようでしたら御回答いただければと思います。よろしく願いいたします。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

まず、1点目でございますけれども、時間軸というようなところで、特にオンラインのところ、どの程度時間をというようなことで御質問があったかと思えます。こちらについては、イメージの一枚紙のほうに具体的にどのくらいということはまだ記載できていないのですけれども、本文の中で、大体これは週末を使うということイメージしております。ただ、具体のところに落としていくときに、どれがどのくらい時間がかかるのかというのは、これから運用のところも踏まえて、実際のプログラムでどの程度かかってくるかというところをまた詳細に検討していきたいと考えております。

2点目は、年齢について御質問がございました。年齢については、前回御議論いただいてというところですが、確かにここには検討が包み切れていないところ記載しておりませんが、今、千葉オブザーバーのほうから御指摘があったとおり、特に多様性の重視枠というようなところでは年齢制限を少し緩和とかする予定はあるのかなと思っておりますので、この検討会の報告書の中でも何歳までにするというのを今の時点ではっきりとは決めにくいと思えますけれども、そこは検討要素であることは含めたほうがいいのかと思った次第でございます。

以上でございます。

千葉オブザーバー ありがとうございます。

南島座長 ありがとうございます。

年齢については募集要項等を書くときは具体化して書かないといけないので、その段階での最終調整ということになるかと思えます。そういうことを補足しておきたいと思えます。ありがとうございます。

それでは、委員の御意見をお伺いしてまいりたいと存じます。家島委員、いかがでございますか。

家島委員 家島です。よろしく願います。

まずは、まとめていただき、ありがとうございます。頭が下がる思いでございます。



私からは2点、コメントしたいと思います。

まず、新プログラム(案)のところを見せていただいてもよろしいでしょうか。一番左下に「語学力が充分でない者に対する語学力習得に向けた措置の検討(再掲)」とあるのですが、私は個人的には通訳がいてもいいのではないかと考えております。

意欲の高い青年を募集するというのが2点目の質問になるのですが、能力が高いのが前提で、かつ意欲の高い青年を募集していくのか、あるいは能力はまだ十分ではないかもしれないけれども、意識が高くて意欲がある人たちを対象にしていくのかというところでも変わってくるものだと思います。必ずしもグローバル・リーダーが語学にだけているかということ、特に日本の政治のリーダーを見るとそうではないパターンも見られるかなと思いますので、能力があることイコール語学力があるではないと思います。課題に対する意識があるけれども、語学に関しては十分ではないといったところも意欲のある青年とみなせるのではないかと考えます。

その場合は、環境を整備するというところにおいて、器械であったり、通訳であったり、そういったもので言語的なバリアを取り除いてやる、そういった環境整備もあってよいのではないかと。本当の意味で国際交流を目指すのであれば、最初はそういったところから入って、経験をしていけば自分自身でやはり話したいとか、通訳を介さずにダイレクトにコミュニケーションを取りたいという意欲が高まって、おのずと語学学習に進むと思うのです。

しかし、現時点では語学力が十分でないということを理由に、あるいは言い訳にして、参加したくてもできないとか、参加しようとすると思わないという方々もおられるのではないかと考えますので、テクニカルな部分で解決できるものに関しては環境整備をする。本当の意味で大事なことというのは何か。不十分な拙い英語でコミュニケーションを取ることが目的なのか。それとも、通訳は入るけれども、質の高い、密度の高い議論をすることが目的なのか。そういった本質はどこかというところを見据えて、語学的なバリアを環境整備で調整することができないかということをお願いしたいと考えております。

語学力がない人は語学力をトレーニングしてから来てねというのは、身体的な、例えばハンディキャップがある人に対して、自分でできるようになってから来てねと言っているのに等しい、あるいは近いのではないかと考えます。そうではなくて誰でも参加できるように環境を調整することが国には求められているのではないかと考えますので、そこを御検討いただければ幸いです。それが1つ目です。

2つ目は、先ほどどちらと言いましたが、「意欲の高い青年」という言葉が報告書に度々出てまいります。「意欲の高い青年」というのが具体的にどのようなイメージなのか、事務局にお伺いしたいと考えております。今まで、能力は高かったのだけれども、やる気がない学生が参加していた、だから意欲を重視していくということなのか。それとも、能力は問わないとは言いませんけれども、能力はこちらで教育していくので、意欲とか、やる気、気持ちが大変なのだと、何だったらその人たちはプログラム参加前までの研修でこっ

ちが引き上げてあげるから、意欲がある人を是非求めるというような方針なのか。この対象がどこにあるのか。それから「能力」というのを落とした理由、あるいはあえて書かなかった理由、意欲・能力が高い青年ではなく意欲の高いというところにもし何か特段の意味があればお伺いしたいと思います。能力は当然のことなので書きませんでしたとか、あるいは能力が高いという上から目線になるので意欲を落としました。意識ではなくて意欲にしたのは、意識高い系というのは、最近ではちょっと悪いイメージですので、それを避けるために意欲にしたのか。

その辺り、少し気になったので、教えていただければ幸いです。

南島座長 ありがとうございます。

環境整備のところを具体的にここの文言を差し替えるとしたら、どういう表現がよろしいでしょうか。御参考までにお伺いできれば幸いです。

家島委員 通訳の導入、翻訳機など、環境を整える、そういったことが大切だなと。これはここの表に入れろという意味ではなくて、将来的にはということ、その余裕があればそういうことも検討したいと。そういうことも書いてあればうれしいなぐらいの感じです。以上です。

南島座長 ありがとうございます。

御指摘の部分については調整して記載させていただければと思います。

2つ目の「意欲の高い」については事務局からその意図についてお願いします。

梅田参事官補佐 今、御質問いただいた「意欲」というところでございますけれども、まず考え方としてですが、検討会の議論の中でもこの意欲に関して着火をすることも必要というようなお話もあったかと思えます。今回、我々が目標にしているのが次世代グローバル・リーダーの育成という形になっているところで、そこについて現時点での能力云々ということよりは、将来、グローバル・リーダーとして活躍したいというような気持ちを持っていることがまず参加の条件なのではないかと考えております。さらに、そういう意欲を持った人がこのプログラムに参加すれば、ここに示した5つの要素、そういう要素を高めたいという意欲を持った人が集まるのが将来のグローバル・リーダーの育成につながるのではないかと、こういったことを意図して「意欲ある」という表現をさせていただいているということでございます。

南島座長 家島委員、いかがでございましょうか。参加の条件としてという切り口で書いてみたということです。

家島委員 能力と意思を含めた意味での意欲が高いということで理解しました。ありがとうございます。

南島座長 ありがとうございます。

それでは、川澤委員、お願いできますか。

川澤委員 御説明ありがとうございます。全体としてこれまでの議論をうまくまとめていただき、ありがとうございます。

細かい点も含めて5点だけよろしいでしょうか。

まず、1点目が報告書の2ページ一番下の部分です。これまで効果検証がされてきたことを踏まえてということだと思えるのですが、文言上の問題だと思えるのですが、「その目的に照らして、一定の効果をあげてきたことが示唆されるけれども、今後の評価にあたっては、これまで以上に具体的かつ短期的・長期的な効果検証を行う必要」という形で、これまでもやってきたのだけれども、より必要という形にしたほうが文章が読みやすいかなと思えました。

2点目が、6ページの「次世代グローバル・リーダーに求められる5つの要素」の「未来志向」の部分で、2行目に「次世代グローバル・リーダーは、足元の課題だけではなく」とあります。もちろん当然ではあると思いますが、現在に至る流れを知っているということも今の情勢を理解する上で重要だと思えるので、現在に至る歩みや足元の課題を理解するだけではなくといったことで、それも理解しつつ、未来を語れるという意味合いが重要ではないかと思えました。

3点目は、11ページの「密度の高い交流環境の創造」の3つ目のポツで「一方で、いわゆる隙間時間などの」とあると思えます。隙間時間の大切さについては理解いたしましたが、それがメインではないと思えるので、隙間時間を含むぐらいのニュアンスのほうがいいのではないかという気がいたしました。

続いて、13ページ一番最後に「データベース更新頻度を高めるためには」という文言がございます。参加するメリットが感じられるということは、データベース更新頻度を高めるためだけではなくて、データベースを含めたネットワークを強化するためには参加するメリットが感じられることが必要というほうがいいのではないかと思います。先ほど駒形オブザーバーがおっしゃったように、活発な活動を継続している既参加青年に国際交流の場を提供したり、事後活動の新たな参加、例えばのところにはいろいろあると思えますが、とにかくデータベースの更新頻度を高めるためというだけではないほうがいいのではないかと思います。

最後に、14ページの5ポツに「ダッシュボードと連携し、マクロでの」ということがあります。マクロの素案については前回お示しいただきまして、非常にすばらしい取組だと思ったのですが、一方で、ミクロの事例ベースの見える化というのも大切だと思えるので、ダッシュボードと連携するなど、マクロ及びミクロの見える化というところではいかがかと思えました。

細かい点ですが、以上です。

南島座長 ありがとうございます。

具体的に5点ほど頂きました。事務局、御指摘について何かございますか。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

今、頂いた御指摘については、もう少しプラスアルファで書けるようにしたいと思えます。特に最初のところでも頂きましたけれども、短期的・長期的というところは、双方の

視点をしっかり取り入れてという形で今後やっていくのだということを書き足していきたいと思っております。

以上でございます。

南島座長 ありがとうございます。

それでは、菊地委員、お願いいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

それでは、私からお話をさせていただきます。まずは、梅田さんはじめ、内閣府の方々、今までの議論をまとめてくださり、ありがとうございます。全体的にアグリーでございます。

私からは、家島さんのコメントに対しての感想と資料に関してのコメントを幾つかさせていただきます。

まずは、家島さんの通訳の件なのですけれども、今の時代でいくとまだ難しいかもしれないのですが、今後これからの時代は同時通訳は当たり前になるかと思うので、そのコストとの兼ね合いで検討の余地があるのかなと思いました。できるにこしたことはないと思いました。

資料に関しては私からは4点ございます。

まず、資料1別紙のSTEP1からSTEP3のところなのですけれども、生み出したい次世代リーダーを本気でつくるための仕掛けがここにちりばめられている必要があると思いました。個人の参加者の方々の可能性を広げることが今後の地球における社会の可能性や日本の未来の可能性を広げているので、その参加者一人一人が改めて自分を深く知って、かつ自分がこれからどうしていきたいのかを見いだす必要があるかなと思っています。

「21世紀の教育」という本があるのですけれども、そこに書かれているトリプルフォーカスというのがあって、1つ目が自分と向き合っているか、2つ目が他者にエンパシーを持っているか、3つ目がシステムインテリジェンスを持っているかなのです。これらを意識してSTEP1からSTEP3をうまく組み立てられるといいかなと思いました。

STEP3で、自分の将来設計書を改めて発表するということがあると思いますが、自分がどうありたいかだけではなくて、世界をどう変えたいのかということまでここで具体化してシェアしていただくことが実際にこれからアクションするきっかけになる可能性が出るかなと思いました。今後、あなたの人生に委ねますという方法だと、何かを起こす人は少ないと思うのですけれども、まずは思いを持って、ここでアクションを発表しよう、やってみようということまで持っていけるといいかなと思いました。

2つ目は、STEP2の地域訪問活動のところですか。せっかく地域で住民との深い交流を含めて体験していただくと思うので、そこで得た課題感というものを、これから船で世界を見た後に地域の解決策やアイデアを持って帰れると、よりグローバルという点では実践的かなと思いました。

3つ目は、資料1の10ページ目の「日本国政府及び各国政府等のリーダーとの面会の機

会の創出」というところです。これはすごくよいと思うのですが、ほかにもテーマの第一人者の方や実践していらっしゃる方々への出会いというのも重要なと思いました。

4つ目ですけれども、13ページ目の事後活動のところ。「ネットワークの見える化」のところで「事業への参加を通じて得た経験を広く社会に還元していく社会貢献が求められており」と書いてあります。これはすごく大事と思うのですが、ただ、プログラムが終わって現実世界に戻ると、やはりすぐ日常世界に戻ってしまうと思います。自分がこういうことをやりたいとかやってみようと思っていたことを忘れがちだと思うので、自分はこういうことを考えていたのだとか、新たな社会課題を知るきっかけがここで必要になってくると思いました。これは第2回以降の令和の国際交流プログラムに合わせて実施するのがいいかと思うのですけれども、例えば、難民、レイシズム、気候変動などの様々なテーマで新たな社会課題を知るきっかけの一端をつくるといいかなと思いました。

私からは以上です。

南島座長 ありがとうございます。

御指摘を具体的に4点ほど、一番最初の発言は家島委員へのコメントということで頂いたわけですが、本文を何か直したほうがいいとか追加したほうがいいということはどうですか。中身の話をさせていただいて、「運用面でこういうところに気をつけるべき」という御指摘を頂いた部分が多かったかなと思ったのですが、本文を具体的にもう少しこの一言を入れておいてほしいとかいうところがございましたら、後ででも結構ですが、御確認いただければと思います。

菊地委員 分かりました。後でお伝えします。

南島座長 ありがとうございます。

それでは、中村委員、お願いします。

中村委員 こんなすばらしい資料をまとめていただいたことに私も心から感謝しております。

10ページ目の「各国政府と協調して行う大規模な青年国際交流プログラム」と書かれているところに「現在、青年国際交流事業では、内閣府とASEAN各国との共同事業による『東南アジア青年の船』事業、内閣府が主催し、各国政府の協力を得て行う『世界青年の船』事業等の」と書いてあります。日中と日韓は航空機事業と聞いているのですけれども、なぜ日中とやっているのか、なぜ日韓とやっているのかというのは、やはり領土問題等もある近隣諸国との草の根レベルというか、青年の頃からの交流をしていくことの重要性が根底にあるのではないかと思うので、きちんと日中と日韓を書いておいたほうがいいのではないかという印象を持ちました。

今回の議論は、新プログラムのイメージを見ても、どうも「東南アジア青年の船」と「世界青年の船」、船の事業を想定して書かれています。ただ、航空機事業のほうはやめるのだとか、そういう話は全くされていなかったと理解しているので、日中や日韓も、より多く、大きな船のプログラムの中に組み込んでいくような新しい発想もあると思いますが、

やはりロシアとか、中国とか、韓国などの近隣諸国はどうしても領土問題とか様々な問題を抱えがちです。それゆえに、こうした青年国際交流事業の果たす役割というのは長い年月をかける必要がある。そこをもう少し丁寧に書いたほうがいいのではないかと思った点があります。つまり、新プログラムのイメージはあくまでも船を想定しているということで、航空機事業をおろそかにしているわけではないというか、その辺りが一見しただけでは読み取りにくいという印象を持ちました。

次に、15ページの「上記の観点から、国内航路で共同生活をしながら」も、あくまでも船を想定して書かれているのかなと思ったのですが、今はどうしてもコロナの問題とかいろいろあって、国内航路でということは理解できるのですが、やはり今回が前例となって今後何かやっていくとき、さらに何年かたって、より感染状況とか、それに対する対策が落ち着いたときは、島国である日本が船で海外航路で親善を深めていくということは非常に価値のあるものだと思いますので、その要素が残っているような書き方をしておいたほうがいいのではないかと思います。多くの青年が、行った国でホームステイさせていただいたということは大変大きな体験として残っていきますので、そういった要素も可能になった時期には検討するというようなこともどこかに記載していただいたほうがいいのではないかという感じはいたしました。

最後に「おわりに」の2つ目のポツに「この際、次世代グローバル・リーダーの育成という観点に加え、関係各国の意見や国際交流による国際親善としての役割などにも留意が必要」とあるのですが、ついでにというように聞こえてしまうので、そうではなくて、やはり役割が重要ということをきちっと認識するような書き方にしてもらったほうがいいと思います。何となくついでにと読めてしまうような気がしまして、でも実はとても重要だと思います。

私も体験上、第9回「東南アジア青年の船」に参加したときには、自分のフィリピンのおじいちゃんは日本兵に殺されたということをはっきり言われて、青年たちはみんな「ああ、そうなんだ」という思いをしたのですが、何年もたった頃には非常に活発な交流がなされていたという、やはりこういった国際親善の積み重ねにおける国と国の関係を支える土台になるというのは、ぽつんとした島国の日本にとってはとても大きな意味のあることだと思うので、そこはしっかりと書いておいたほうがいいのではないかという感じがいたしました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

4点ほど頂きましたけれども、日中、日韓、船のところ、それからホームステイ。ここは解像度をもう少し上げて書けないかということをお願いしたのかなと思います。いろいろバランスを見ながら書いていくのだと思いますが、御検討を頂ければと思います。最後のところは、役割が重要だということをちゃんと強調していただきたいということです。ありがとうございます。

それでは、宮崎委員、お願いいたします。

宮崎委員 今までの議論をうまくまとめていただいて、大変よくまとまっていると思います。ありがとうございます。

私から3点です。

まず、新プログラムのイメージのところ、社会人参加の部分でいろいろな視点が入れているので非常によいと思いました。

2点目、家島さんの議論の語学力のところですが、グローバル・リーダーの育成を目的としているところもあるので、これから同時通訳機が発達すればあるのかもしれませんが、ある程度、選考の期間もあるので、やはり自分の言葉で伝えるということが必要なかなと思うので、通訳はないほうがいいのかと思います。

3点目、最後の15ページのところです。「期待」というのは、他人事になってしまうので、輩出していくことを「目指すべき」など、もう少し強めの言葉のほうがいいのかと思いました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

同時通訳の話を受けましたけれども、家島委員、いろいろ御意見も出ておりますが、何か改めてコメントございますか。

家島委員 このプログラムがダイバーシティを打ち出して行くのであれば、身体的なハンディキャップがある人だけではなくて、そういった語学の部分、知的能力としてのハンディキャップがある人に対する配慮が必要ではないかと思います。皆さんは多分努力すれば語学力は鍛えられるものだと思いかもかもしれませんが、必ずしもそうではありませんし、それは努力しない人を排除するんだと言っているのと等しいわけです。知識とか学力に関する研究知見も少し意識していただくと、多分意図が分かるかと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

ある意味永遠の課題のようなところもあるかと思いますが、「この事業として何を強調するのか」ということも重要ということです。

その他、今度は委員、オブザーバーを含めまして、皆様にいろいろと御議論いただければ、その他の論点についても御提供いただければと思います。

私のほうからも申し上げたいと思います。「全体の構造」なのですが、「はじめに」と「おわりに」ということで書いてありまして、「はじめに」と「おわりに」が中身が重複しているようなところがあります。もしそうであれば、一番最初にサマリーのようなものを一枚紙にさせていただいたほうがすっきりするかなと思います。サマリーを頭につけて、そこだけ読めば一応内容は分かるということで、「おわりに」のところは振り返って強調したいところが表現されるのかなと思っていて、冒頭に取り出してサマリーをつけることを御検討いただければと思います。これが1点目です。

2点目。目次を見ていただいたほうが分かりやすいかと思えますけれども、「2.」のところが「これまでの事業の成果」と「事業強化の視点」と書かれていて、その2つが一緒になっております。さらに、「事業強化の視点」のところについては階層が第3階層(2.3.1と2.3.2)となっております。「これまでの事業の成果」と「事業強化」の視点は切って、新たにこれを第3項目、それ以下を第4項目、第5項目というふうにしたほうが分かりやすくなるかなと。「事業強化の視点」は、この事業で何を強調するかということに関係するので、1つの項目として起こしてしまったほうが強調点もこの中に入っていますので分かりやすいかなと思えます。この委員会の中で大変重視して議論してきたところでありますので、独立した項目を与えていただければと思っております。

3点目です。「4.事業強化の視点を踏まえた新たなプログラムの方向性」ということで書いていただいている部分ですが、これは私が補足の説明をしないといけないところかなと、私の注文なので。何を言っているかといいますと、「事業の評価をどうするか」ということを考えた場合に、実は「目指すべき青年像」ということで評価をどういうふうにできるのか、どういう人が育成できたのかということアウトカムとして、しばしば見ようとしがちですが、それはかなり長い年月がかかってしまう。場合によっては人生の終盤まで追跡調査をしないければいけないことにもなるかなと思えます。それは難易度が高いし、難しいことだし、コストもかかるお話かと思っております。それを行政機関の評価ということでやるのかどうかというと、あまり意味がないのかなと思えます。それは重要なことではありますけれども、行政活動の評価ということであると、「何にエネルギーを割いて現状を変えようとしているか」ということのほうが重要ではないか、こんなふう思っております。

それで「事業強化の視点」です。どこをパワーアップするのかということそのまま評価ということにしてはどうか。こういうふう考えていたわけです。新しくレベルアップ、スパイラルアップするときに、最後に「事業強化の視点」ということでまとめていただいていますけれども、すなわち評価、エバリュエートするところも同じところをエバリュエートするというふうにしますと説明も容易になるのではないかなと思っております。事前の調整の段階でありましたけれども御意見を申し上げ、そんなふうな書き方をさせていただいているところです。私のほうからの補足説明ということで、御理解いただけましたら幸いです。

今の私のコメントで事務局は何かございますか。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

こちらのほうでまた御意見をいろいろ頂ければと思えます。エクゼクティブサマリーにしてみたらどうかという話で、その辺りはまた検討させていただければと思えます。

南島座長 ありがとうございます。お預かりいただければと思えます。

それでは、ここから先は自由に御発言いただければと思えます。オブザーバーを含めまして、委員の皆様、何か追加で御発言になりたい方はお願いいたします、家島委員、お願



いいいたします。

家島委員 家島です。

もう一つの新プログラムの案の資料を見せていただけますでしょうか。こちらについて先ほどの座長の意見とも重なるところがあるのですが、何が新しく何が伝統継続なのかということがここであまり見えないところもあるので、それが視覚的に見えやすくなると、どこが新しくなるか、あるいはどこが改善されたか、どこが増えてきた新しいものかみたいなものが分かるのかなと、いわゆる伝統の継続と大胆な変革といった部分がこのに見えるといいと思います。

例えばですけれども、伝統を継続しているものについては赤が入っていて、新しく出てきたものには「NEW」みたいなものがついているとか、大きくリニューアルしたものについては紫になっている。色でもいいですし、あるいは3段ぐらいになっている、伝統のラインと新規のラインとリニューアルのライン、見せ方はいろいろあるだろうと思いますが、そういった伝統継続の部分、新しく出てきた部分、リニューアル、改善して新しくなった部分というのが、色とか字とかでビジュアルに見えるといいと思いました。これは今やっている部分だけではなくて、将来の見せ方の話なので、これも課題として頭に入れておいて、将来そういったことも検討していただければうれしいというところです。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

事務局、いかがでしょうか。

梅田参事官補佐 ビジュアルにもう少し分かりやすくというお話だったと思います。新プログラムのイメージという形でまとめさせていただいているのは、実は新しい視点ばかりという形になっておりますので、どこが強調したいところなのかというのは分かりやすくビジュアルにできればと思っております。こちらは大体新しいものが入っているような構造になっているかなということで、補足説明でございます。

南島座長 ありがとうございます。

菊地委員と川澤委員、手が挙がっております。では、菊地委員からお願いいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

先ほど具体的にどこをどう変えるべきかということで御依頼があったので、出させていただきます。

資料1の7ページ目の「3つの局面と事業強化の視点」の事業実施段階のところですが、ここの項目に追加で、自己、他者、システムを理解し、世界における自己の役割、世界をどう変えるのかというのを認識するという要素を入れていただければいいかなと思いました。

もう一つは、すぐ下の事後活動段階のところですが、世界を変えるアクションに結びつくような項目を追加したいということで、社会課題に触れ、アクションを起こす機会の提供というものをいれるとどうかと思いました。

もう一点は、最後の「おわりに」もしくは「はじめに」のどちらかに書いていただくのがいいかなと思うのですが、追加で多分2つ目のポツになるかと思います。「次世代グローバル・リーダーの育成という観点に加え」、ここが一番大事なところなのですが、さらっと書いてあるので、ここを一つの項目として取り上げるのはどうかなと思っています。個人の可能性を広げることが日本をはじめ、地球の未来の可能性を広げると考えており、未来を担う次世代グローバル・リーダーの育成が重要というような要素を入れていただくのがいいのかなと思いました。

別紙に関しては、先ほど申し上げたことを別紙にも反映という形でお願いできればと思います。

以上です。

南島座長 具体的に御提供いただきまして、ありがとうございました。川澤委員にお待ちいただいておりますが、ちょっと時間を頂ければと思います。

先ほど菊地委員がおっしゃっていただいた7ページの事後活動段階のグローバル・ネットワークのところですけれども、人材像の の社会貢献というところにも関係してくるお話かなと思います。私も実は違和感がありまして、社会貢献、英語で言えばSocial Contribution、社会実装みたいなイメージで捉えるとSocial Implementation、これはVolunteerismと書いてあります。ここにも関係してくると思いますし、そこを英語でどう表現するかということと、内容をどうするかですね。グローバル・ネットワークにこれが関連してこないといけないので、 の社会貢献 (Volunteerism) と書いてあるところですが、何か御意見ございませんでしょうか。

菊地委員 私もそこが少し気になっていまして、ボランティア精神を持つというふうに書くと、仕事とは別にとというような意味合いが出てしまうとちょっと語弊があると思いましたので、ここは何かしら変更が必要なのではないかと思っています。

南島座長 ほかの委員の方でも、もし何か思いつかれたことがありましたらコメントいただけましたら幸いです。

お待たせいたしました。川澤委員、よろしくお願いいいたします。

川澤委員 ありがとうございます。

先ほど中村委員から、日中、日韓についてのお話がありました。確かにこの新プログラムに関わる話で、船の話の主眼に据えて書かれているので、そこはレビューが必要かなと思う一方で、別紙のほうを拝見しますと、恐らく日中、日韓でも青年の募集・選考や事後活動とかは共通しているのではないかと思います。具体的にSTEP 1 の関係構築の とSTEP 2 の と 以外は、日中、日韓でも共通して適用が可能なかなと思ったのですけれども、その辺りはいかがかなと思いました。

そうしますと、確かに本文中でも、例えば11ページの「密度の高い交流環境の創造」の最後のポツのところの「具体的なプロジェクトのプランニング」「現場でのプロジェクトの実践」、この辺りは船の事業を意識しているのだと思うのです。ただ、その辺りは、船

についてはという形で特化したものについては言及していただいてという形で、この議論全体のコンセプトはその事業でも生かせるという形なのかと思いました。その辺りはいかがでしょうか。

南島座長 ありがとうございます。

事務局、いかがでしょうか。飛行機の事業と船の事業、どういう限定のつけ方をするのか、あるいはどういう読み取り方をするのかということですが、いかがでございましょうか。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

今、御指摘いただいたように、全体のコンセプトというところでは、船の事業にかかわらず全ての事業に共通するような、こういうリーダーを育てたいとか、そういうところも含めて関わってくると思っております。一方で、共同生活で船を使うという話が入ったりということで、そこが若干混在している印象をお持ちになっておられるのかなと思っておりますので、その辺りは少し整理させていただければと思っております。

別紙のほうで示している新プログラムのイメージでは、これが一連のものという形になると思いますが、この中で要素として、どのプログラムにも適用可能なもの、船の事業という形で適用可能なもの、幾つかあるとは思いますが、基本的なコンセプトというところは全事業に共通して適用できるようなものとして全体を整理していきたいと思っております。

南島座長 ありがとうございます。その辺りが伝わるような何か工夫ができるといいですね。先ほどもビジュアルというお話がありましたけれども、色をつけてみるとか、何か工夫ができそうな気もいたします。ありがとうございます。

宮崎委員からお手が挙がっておりました。宮崎委員、よろしく願いいたします。

宮崎委員 7ページの「社会貢献」のところは、最後に「社会課題の解決」とあるので、「社会課題解決」なのではないかと思いました。というのは、企業活動というとき、よく言われるのが、CSRというのは、会社が稼いだお金を寄附するとか、ドネーションすることになると思うのですが、今言うSDGsというのは、本業でSDGsに挙げられている課題を解決することになるので、こちらの社会人を対象にしたプログラムということであれば、社会課題解決をしていく精神が求められるというか、自ら社会課題解決をしていく精神というようなことになるのかなと思いました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。社会人を重視するといいながら、社会人のことを十分に考えているのかという疑問を提起していただいたと思えます。まさにおっしゃるとおりでありまして、企業人にもこれを読んでもらって通用するような形に直さないといけないというのは大きな宿題を頂いたと思っております。ありがとうございます。

ほか、いかがでございましょうか。家島委員、よろしく願いいたします。続いて、駒形理事長という順番で行きましょう。

家島委員 私よりも先に菊地委員が手を挙げておられました。

南島座長 そうしましたら、家島委員、駒形理事長、菊地委員の順番でお願いいたします。

家島委員 失礼しました。そうしましたら、「社会貢献 (Volunteerism)」の上の「国際・地域感覚 (Glocalism)」について私も少し違和感を持っておりました。「ism」というのは思想であったり主義というものでして、特にGlobalismというのは御存じのとおり、ちょっとアンチの人もおられるものなので「ism」をつけるのがいいのかどうか。もちろんここは一つの単語でまとめようとしたので、Global and Localとせず、あえてGlocalにしたのかなと思います。しかも、それを正しく言うのであれば、Glocal Perspectiveだと思うのですけれども、2単語にせずに1単語にまとめようとした努力、苦肉の策の結果かなと思っていたので特に指摘はしなかったのですが、ほかの委員の方々ももし疑問とか違和感をお持ちなのであれば、ここはGlocal Perspectiveにしてしまってもいいのではないかと考えた次第です。

要するに、世界を見て、地域を見て、そして社会のことも考える、そういったパースペクティブとかマインドセットと言われているようなものが言いたいところかなと思ったので、1単語でなくても2単語でもいいということであれば、そういった、より本当の意味というか、本来伝えたいことを的確に表すようなワーディング、言葉選びにしてはどうかと思いました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

御指摘のとおりだと思います。単語2つ以上が可か否かというところですね。お預かりして検討させていただければと思います。ありがとうございます。

駒形理事長、お願いいたします。

駒形オブザーバー ありがとうございます。

3つあるのですけれども、簡単に申し上げます。

15ページの「おわりに」の黒丸の3つ目が「参加者の意見等も丁寧に聞き取りながら、不断の見直しを図っていくべき」となっています。この参加者なのですけれども、どういう意味なのかということです。もし本体の事業に参加する青年ということだと、聞き取りするときは既に既参加青年になっていますので既参加青年か、あるいは恐らくこの事業に様々な形で関わったステークホルダー、IYEO、地方公共団体、ローカルユース、そういった人を含めた参加者という理解でよろしいですかというのが1つ目です。

2つ目は、プログラムの中で地域実践活動という非常に新しいプログラムが入っているのですけれども、これは事前にオンラインでプランニングするわけですね。ですから、事前にプランニングする段階で、どこに行くか、特定の県、地域になるのですけれども、そこ調整しないとプランニングもできないだろうと、要するにフィージビリティが分からないと、せっかくプランニングしたけれども、行ってみたら無理だという話になります

から、事前の調整は結構大変だということと、地域実践活動は具体的にどんなことをするのか、まだイメージが湧かなくて、大変難易度の高いプログラムではないかと思います。もちろん地元の自治体やIYEO、NPO、関係者の方の知恵を借りてつくっていくのだろうと思いますけれども、その点はちょっと心配です。もう少しイメージが湧く、あるいはこういうプロセスを踏んでというブレークダウンしたような書き方をしてはどうかと思います。

最後は、この報告書がどういうところに一番重みがかかるか、適用されるのかということですが、船の事業が中心だろうと思いますが、特に日中、日韓と「東南アジア青年の船」は2か国間事業、共同事業ですので、募集とか事後活動はあれですが、自身のプログラムについては相互に理解して、はっきり言って相互に賛成しないと、日本はこう考えているのだけれどもと押しつけられないので、相手の意見も聞きながら共同で一緒になってつくっていくということになっていくので、そうしないと外交上の問題もあるのでなかなかできないだろうと、せっかくこちらはこういう思いでといっても、向こうがそれに賛成してくれないといけないので、説得しなければいけないし、一緒になってつくっていくのだろうと思っています。

特に「東南アジア青年の船」については、どういうプログラムにしていくかというのは、関係国、関係同窓会の支援がないとできませんので、そこはしっかり連携してというか、同窓会を含めた相手の意見もよく聞いてプログラムづくりをしていくというのが大事だと思います。これは意見です。ありがとうございます。

南島座長 ありがとうございます。

事務局、お答えいただける範囲でお答えいただければと思います。1つ目が参加者の定義、2つ目が地域実践活動の具体的なイメージを補足いただけないか、3つ目が諸外国との外交交渉の留保というのは本文に多少なりとも書けないか、特に「東南アジア青年の船」のイメージを念頭に置いてということではありますが、いかがでございましょうか。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

1つ目、参加者の定義ですが、今、「参加者の意見等」という形にしておりまして、区切りというところでどこまでを参加者というか、明確にはしておりませんが、参加者の意見等という中にももちろん関係者の意見、そういうところも含んで丁寧に聞き取りをしながら不断の見直しを図っていく、こういうことを考えておりますというのが1つ目のお答えでございます。

2つ目ですが、地域実践活動の具体的なイメージをしっかりと持っていなければいけないのではないかというお話だと思います。こちらにつきましては、これからしっかり考えていくこととなりますけれども、基本的には地域の課題を解決するという形ですので、その地域をまず選んで、その地域が抱えている課題はどのようなものがあるか、それから、お話がありましたけれども、NPO、OB・OG、関係者を巻き込んでということになりますので、そこで行っている活動の団体、そういうところとも、こういった活動が実際にできるのか、また育成の観点でどういう活動をしたらいいかというのは地方公共団体、関係者、

OB・OGにもいろいろアイデアをもらいながら組み立てていくことになるのだろうということとあります。具体的にこの活動をしませぬというのが今お示しできなくて申し訳ないのですけれども、これから構築していくということを考えております。

3つ目、共同事業のところについて相手国の意見も聞きながらということでございますけれども、こちらについては記載した部分があったはずなのですが、そうした視点も踏まえながら、読めるように書いていきたいと思ひます。

取りあえず、お答えはここまでとさせていただきます。

南島座長 ありがとうございます。最後のところは記述を確認していただいて、なければ書くつもりであったということだと思ひますので、書いていただいて。

梅田参事官補佐 すみません。10ページ目に「各国とも協調しながらプログラム設計を行う必要」と記載してはおりますけれども、この辺りの表現も含めてまた考えますが、一応こういう形で各国との共同事業については強調したプログラム設計が大事ということは明記しているところでございます。

以上でございます。

南島座長 ありがとうございます。

私からも補足申し上げます。1点目の参加者ですけれども、今、事務局から説明したような書き方ですと、「参加者の意見等を丁寧に聞き取りながら」みたいな書き方になるかと思ひますが、「ステークホルダー」とか、ちょっと違う表現を検討してもいいかなという気もいたします。ここは表現ぶりのお話ですね。広い意味でのということとあります。

地域実践活動については、経験がないので、取りあえず実験的に幾つかの自治体に御協力いただいて、試行的事業として取り組んで、経験値を高めてから実際の事業として導入するということも考えられると思ひます。家島委員からもコメントいただいておりますね。

「地域実践活動の内容については、教育・研究機関、企業、団体等と連携しながら、効果的かつ実現可能性の高いプログラムの構築を検討するという必要なら付記しておけばよいと思ひます」と書いていただいております。そういうところを御参考にさせていただければと思ひます。ありがとうございます。

お待たせいたしました。菊地委員、よろしくお願ひいたします。

菊地委員 ありがとうございます。

先ほどの7ページ目の求められる人物像、 の社会貢献のところですが、宮崎委員がおっしゃっていた課題解決について補足させていただければと思ひます。ここの項目なのですけれども、よりよい社会をつくる新たなアイデアの実現というのも必要だと思ひます。課題解決というのは、もともとある問題を解決することなので、それよりか課題設定のほうが大事なのではないかと思ひます。教育現場でいろいろと課題解決、課題設定の話があるのですけれども、潮流では課題設定のほうに寄ってきているので、そちらのほうかふさわしいのかなと思ひました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

前回の議論で、ここも青年国際交流事業がゴールではなくスタートとして考えるべきだという御議論も頂いていたかと思えます。そこも併せて、今日は幾つか意見を聞かせていただきましたので、英語の書き方も含めまして、再検討していただくことになろうかと思えます。ありがとうございます。

そのほか、いかがでございましょうか。では、中村委員、よろしいでしょうか。お願いいたします。

中村委員 大変チャレンジングな、新しい意欲にあふれたプログラムだと思うのですが、内閣府の事務局という意味ではなくて、実際に参加青年たちを裏方として動かしていく事務局の力量がかなり大切になってくると感じているということを一言申し添えさせていただきたいと思えます。

かつてはIYE0のほうにもブレーンというような、ほぼ毎年の長年の情報を頭に全て持っているような、そういった存在の方がいまして、その方がどこからでも情報を引き出してこれて、日本全国とネットワークを持っているという状況があったと理解しています。今後、実際にこういったチャレンジングなプロジェクトを進めながらも、裏方がどんどん人が替わって、去年どうだったか、おととしどうだったかとなってしまうと、実際の表舞台を支える裏方としての役割を果たしていくのがなかなかチャレンジングだと思いましたので、青年たちが舞台上で思い切り演じることができるような裏方の力量、裏方がしっかりとやっていくための仕組みも併せて考える必要があるかなと思いました。

もしかしたらそのためには、この間も少し申し上げたのですけれども、例えば定年後で時間も、まだ力もあるような方々がある程度、まさにボランティアで支えるような、そういった参加ができるような仕組みも検討する必要があるかもしれません。スタッフが変更になっていたり、もちろん入札で選ぶというような、役所としてのことがありますと、どこまでコンティニューイティ（継続性）が担保できるのかという辺りも非常にチャレンジングな課題になると思えますので、一つの考慮点として発言させていただきました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

中村委員、本文で言うと13ページから14ページ、ここにネットワークの強化ということが書かれております。あるいは別紙、新プログラムのイメージのほうですと、今の御指摘は書かれていないのですけれども、ここら辺りに今の御意見を書いていただくとしたらどういうふうに表現したらよろしいでしょうか。ブレーン、裏方、そこに多分ネットワークが関係していくということをイメージとしてはお持ちなのかなと思えます。

中村委員 ただ、ネットワークの部分よりもより広義ですね。裏方を支えるプロ、その部分が書かれていない、そこをどうするのかということも指摘したまでなので、ネットワークの中に入れるには裏方のプロという世界は違うかなという気もいたしますが、どうなのでしょう。

南島座長 運用で留意すべき事項として考慮に入れる必要はとてもありそうな印象ですが、本文に入れるのはどういうふうにしたら入るかなと思っていたのですが、もしお知恵があれば。

中村委員 新しい要素になるのですかね。今までは受託したところがおやりになっていたと思います。今後ももちろん受託したところがおやりになる原則は変わらないと思うのですが、どうやってノウハウを継承していくか、その辺りを留意するというのをどこかに書ければいいのかなとは思っています。

南島座長 ありがとうございます。承知いたしました。どこかに書き込めるようにしたいと思います。

ほか、御意見等いかがでしょうか。川澤委員、よろしく願いいたします。

川澤委員 ありがとうございます。

別紙の事後活動で4点挙げていただいていると思いますが、この要素が本文の中の事後活動を全て含めているかということ、そうでもないような気もいたしました。既参加青年のプログラムへの参加、地方公共団体との連携強化、この辺りももしかしたら本文に少し登場させてもいいのかなという気はいたします。

先ほど既参加青年の方の参加というところで、国際会議の開催への協力ということもベースにあると思うのですが、積極的に御参加いただくのであれば、ボランティアベースの協力というのは、全てボランティアでということも難しいという気がしますので、もしかしたら支援・協力みたいな形で予算的な面も含めて考慮してもいいのではないかと思います。各界で御活躍の方が多いと思いますので、現役世代を踏まえての予算措置は難しいと思うのですが、事後活動を手弁当で全部という形にならないような配慮は継続的なコミットについては必要なのかなと思います。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

13ページから14ページの内容とSTEP4の事後活動のところのずれみたいなものもありますので、その他というふうな形にするか、何か表題をつけるかはともかくとして、項目をもう一つ起こしていただいて書き加えるということを検討したほうがいいかもしれないですね。非常にいいお知恵を頂いたと思います。ありがとうございます。

そのほか、いかがでしょうか。千葉副部長、よろしく願いいたします。

千葉オブザーバー 令和の新しいプログラムということで、今回、報告書を出していただくということなのですが、1つは、皆様方の議論の中にもありましたが、例えば船という事業でいえば、コロナを避けるために国内のクルーズ、地域活動訪問、地域実践活動というものがSTEP2に入っているわけですが、これはコロナを避けるための一時的な措置なのか、例えば来年度のうちにコロナがある程度終息した、その次は国内での地域活動などをやめて海外に完全にシフトしてしまうのか、この辺のところを内閣府のほうではどのようにお考えになっているのでしょうか。



南島座長 事務局、お願いいたします。

梅田参事官補佐 ありがとうございます。

今、千葉オブザーバーからお話がありましたけれども、コロナを避けるというのものの視点ということではありましたが、今回いろいろ御議論いただいた中で、やはり実践の場をつくるということが非常に重要ということで、そういうプログラムに取り組んでみようという発想でございます。そういう意味では、最後の「おわりに」のところに書いておりますけれども、新たなプログラムは継続的に実施していくことを考えているというのが事務局の考え方でございます。地域の実践型プログラムという形で仕事・学業との両立を図りながらのプログラムをやってみて、その上でこのプログラムの熟度を高めながら、その検証もしながら、今後どうしていくか考えていくというところでございます。

以上でございます。

千葉オブザーバー ありがとうございます。

私も全く同感で、せっかくこういった地域訪問活動や新しいプログラムを入れて、それが単年度で終わってしまうというのも非常に残念だと感じております。中身はこれから精査されるというお話もありましたけれども、是非有意義なプログラムにさせていただいて、ある程度の成果を得るところまで是非継続していただきたいと思っております。ありがとうございました。

南島座長 ありがとうございます。

家島委員、何度かチャットのほうでつぶやいていただいているようですから、御発言いただいてもよろしいですか。

家島委員 発言するほどのことでもないのですが、具体的な書き方等をチャットに書きましたので、必要に応じ、参考にしていただければということでございます。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

そろそろお時間が近くなってまいりましたけれども、御発言いただける方はほかにはおられませんでしょうか。駒形理事長、よろしくお願いいたします。

駒形オブザーバー さっきも中村委員から話がありましたが、やはりこういう事業、プログラムを運営していく人材が大事だということなのです。継続的にやっていくためには人材を育成するための人材が必要だと、一つは、内閣府の側でこういったプログラムをしっかり運営していくための体制、人材をちゃんと置いてくれるのか、これが非常に大事です。内閣府のほうでそういった専門的な人材を育成しているとはあまり思えないので、いろんなところをぐるぐる回って、たまたま国際交流の担当に来たとか、人事の配置でそうになっている可能性はありますけれども、やはり主催者側の人材体制は大変大事だと、それから、実際にプログラムを運営して支えていく側の人材の育成、継続も大事だと思いました。

以上です。

南島座長 ありがとうございます。

役所はどうしても人事異動が付き物でございます。せっかくここまで話をさせていただいて、ここまで議論を高めていただきましたので、それをロックするという意味がこの報告書にはあると思っておりますので、書けることはなるべく書いていただいて、残すべきことは残していくということが大事かなと思っております。ありがとうございます。

そのほか、御発言よろしいでしょうか。

それでは、司会を事務局にお返ししたいと思います。最後の議題、その他で、次回の予定とか、次はどういうことをやろうとしているというふうな御説明を頂きたいと思えます。事務局、よろしく願いいたします。

梅田参事官補佐 本日も、これからさらにステップアップしていくような御意見を頂きまして、本当にありがとうございます。

次回は最終回になります。開催の時期は、今、照会をかせせていただいておりますが、6月中旬から下旬で調整しております。こちらについてはまた調整させていただきます、決定してまいりますので、御協力のほどをよろしくお願いいたします。

私から以上でございます。

南島座長 ありがとうございました。

若干時間を残しておりますけれども、御発言ないようでしたらこれで閉じさせていただきますと思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、本日の意見交換等についてはここまでとさせていただきます。

以上をもちまして、第5回「青年国際交流事業の在り方検討会」を終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。